
カナ・・・大好きだよ。

< 綾乃 >

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カナ・・・大好きだよ。

【Nコード】

N8742D

【作者名】

<綾乃>

【あらすじ】

カナとはいつも一緒だった。離れられないと思っていた。だが・・・そんなカナを殺したのは私だった。

1・・・カナが生き返った。

最近カナが生き返った。

生き返ったカナは意地悪だ。

私の耳元で毎日のように囁く。。。

「死ね・・・死ねばいいのに・・・」

カナの声を子守唄にする日課が始まった。

私がカナと出会ったのは16歳の春だった。

生まれて二回目

お雛様の段飾りを見た日だった。

それは めぐみの部屋に飾られており

女の子らしく整えられた その部屋自体が

お姫様を連想させられ とても衝撃的で

あの日以来 一人部屋に憧れるようになってしまった。

そんな日だったのでカナとの出会いの日を正確に覚えている。

カナとの出会いは不思議なものだった。

カナが どこから来たのか。

それは今でも解らない。

気がついたときには いつもカナは私のそばにいた。

私がカナを必要とするときには 必ず居るのである。

カナとの付き合いは それから 24歳まで続いた。

カナはあの日 確かに死んだ。

それは間違いない。

いや・・・カナは死んだ振りをして機会を窺っていたのか？！？

あれから20年経ってカナは生き返ってしまった。

もう会うことは無いと思っていたのに

カナは 何をするつもりなのだろう・・・！？

2・・・カナの願い

思い切って私は聞いて見ることにした。

「カナ・・・」

でも続く言葉を飲み込んでしまった。

やっぱり聞けない。

「あの時　カナは死んだよね？」

そんなことを聞けるわけが無いのだ。

代わりに出た言葉は

「カナ・・・ビデオでも見る？」

そんなことしか言えなかった。

そう・・・

あの頃の私もカナには何も言えなかった。

いつもカナの後ろに隠れて居たようなものだった。

それが心地よかったし　間違いが無いと思っていた。

「何を見る気なの？」　カナが聞いてきた。

「でも・・・ビデオって言いながらDVDだね」

カナが続けた。

確かにDVDなのにビデオって呼んでしまう。

もう年だからなあ

新しいことには付いていかれない

そう思うとなんだか寂しく感じ　あの頃が懐かしくなってきた。

とりあえず　最新作をレコーダーに入れた。

SAW4・・・

いきなり司法解剖シーンで頭の皮を剥ぎ頭蓋骨を切断し脳みそを取り出し始めた。

私たちは この手の映画が好きである。

意外と平気な顔で見えていられるし食事を取ることが出来る。

ただグロテスクなシーンだけが続くものと違い

SAWシリーズは内容がある！というか

毎回 意外な展開に進んでいくのが楽しみな作品なのだ。

いつものことだけど究極の選択だ。

私には選べないな 悩んでいるうちにタイムアップだ。

そう考えているときに

「あやなら どちらも選べなくて敗者だね！」

カナが私に向かって言い出し

「私は選べるよ！絶対 生き残る。勝者になれるよ。」

と続け・・・

「自分の命は自分で守る。」

と言った。

「・・・・・・・・」

カナは私を責めるつもりなのだろうか？

ただ固まる私を見ながらカナが

「ねえーアイスでも買いに行かない？」

外に出る事を提案した。

私はレコーダーを消しカナに続いて外に出た。

外はきれいな星が輝いていた。

「あ！流れ星！！」

カナが見つけ

「願い事した？」と聞いてきた。

「とっさだったので出来なかったよ！」と答えると

「あやは いつもドンくさいね！」と笑い

「私は ちゃんと願い事をしたよ！」と言った。

「何をお願いしたの！？」と聞いてみた。

「内緒！」とカナが答えた。

予想通りの返事が返って来た。

コンビにまでの道は いつもと同じ道なのに
いつもより長く感じられた。

私たちは何も話さず ただコンビに向かって歩いた。

カナが時々蹴飛ばす小石が転がる音だけが響いていた。

突然

「内緒だけど教えてあげる！」

と言いながらカナが振り向いた。

そしてさっきの流れ星にしたお願いは

「あやの幸せを願ったの。それしかないでしょ！」
と言った。

3・・・洋子はいつも元気

「あや！あやの！！遅刻するよ！」母の声で目が覚めた。
今日は早く登校する約束をしていたことを思い出した。

「まずい！洋子に怒られちゃう！」

私は急いで身支度を済ませて家を出た。

なのにバス停に洋子が居ない。

「なんだよ！急いで来たのに・・・」

私は仕方が無いので一人でバスに乗った。

バスは定時に発車した。

その発車したバスが急に停止したのだ。

「ええ？」

思わず前を見てびつくりした。

発車したバスを止めたのは洋子だった。

バスの前に飛び出し止めたのである。

よく轢かれなかったものだ。

そんなやつが隣に座るなんて・・・

仲間と思われたくないな。

なんて考えたけど お構い無しに洋子は隣に座った。

「いやあ！バスに送れるところだったけどギリギリセーフ」

バスに乗ることだけを考えた行動だった。

「恥ずかしいやつだな！恥ずかしくないの？」

バスを降りてから怒った。

「バスに乗ってから恥ずかしくなったの」と

洋子は答えた。

「あ！」

洋子が走り出した。

学校の横のスーパーで朝市を開催していた。
その会場に向かって走り出したのだった。

戻った洋子はグローブのような大きさのバナナを抱えていた。
「このバナナ美味しそうですね？」

洋子は満足げだった。

「そんなに大量のバナナ どうするの？」と私は心配したが
「大丈夫だよ！教室に行けば1本いくらで売れるってば！」

洋子は暢気だった。

確かにバナナは売れた。

朝市で山済みにされて売られていたバナナを
みんなも横目で見ながら登校していたのだが
行動に出たのは洋子だけだった。

このバナナは美味しかった。

私 「ねえ、信じられる？洋子がバスを止めたんだよ！」
めぐみ 「嫌だ！あや・・その時一緒にいたの？」

私 「そうだよ、信じられないでしょう？」

浩美 「一緒に居なくて良かった」

洋子 「だって・・バスに乗ることしか考えてなかったんだもん」

私 「バナナじゃ許せないよ！」

めぐみ 「そうだよ、なんか別のものもオゴツテやりなよ！」

浩美 「それって結構 恥ずかしいよ！」

洋子 「仕方が無いな、何が欲しい？」

私 「そうだな・・まずは・・ジュース！」

洋子 「ええ、ほかにねだるの？」

洋子が財布から1000円札を取り出した。

その1000円を持って私はジュースを買いに購買へ行つた。

私が部室を出るとカナが付いてきてくれた。

「よく轢かれなかったよね！」カナが言った。

「うん。突然飛び出したから危なかったんだよ」

と私が答えると

「・・・・・・・・・・」

カナがボソつと言った。

「轢かれちゃえばいいのに・・」

そう聞こえた気がした。

「え？」私は聞き返したがカナは聞こえなかったのか
黙ってジュースを選び出した。

ジュースを5本買って私たちは戻った。

「ほれ！どれがいい？洋子はこれでしょう！？」

洋子はガラス瓶に入ったジュースと決まっている。

缶は嫌いなのだ。

口にあたった感触が嫌だと言う。

洋子 「カナの分はあやが飲みな！」

私 「ええ？わざわざ買ってきたのにカナは帰ったの？」

さっきまで居たはずのカナが居なかった。

帰ったのにも私は気がつかなかった。

カナは私とだけ仲が良かった。

他の人たちと関わるのを好まないようだった。

私がお他の子たちと遊んでいるとすぐに帰ってしまうのである。

まあいいか・・私の分にしよう

儲けた気分だった。

その夜 洋子から電話が来て明日は一台前のバスに乗る言う。

隣のクラスの男の子から電話が来て

「明日 話がある」と言われたんだそう。

告白だな・・私は思った。

その子はなかなかいい男である。

だが可哀想なことに洋子は別の子が好きなのだ。

「話の結果は明日 学校に行ってからね！」って事で電話を切った。

遊びに来たカナは

「彼はあやに告白する気なのかもよ!？」なんて言う。

「洋子に頼む気なのかもしれない」なんて言うのだ。

「そんな回りくどいことなんてしないでしよう?」って私は思っよ!」

と答えたものの

「もしかしたら?」なんて密かに期待をした。

期待の膨らむ朝が来た。

4・不幸の始まり

朝 私が登校しても洋子は まだ居なかった。

一台先のバスに乗ったはずなのに登校していなかった。

「洋子は まだなの？」

私はめぐみに聞いてみた。

めぐみも浩美も まだ洋子を見てないと言う。

1時間目が終わっても洋子は現れなかった。

洋子が登校してきたのは3時間目が終わってからだった。

登校してきた洋子の顔は暗かった。

何時もの陽気な洋子とは違う。

「どうしたの？何かあった？」聞いてみた。

洋子は何も答えようとしなかった。

廊下がやたらと騒がしかった。

洋子は原因が解っているらしく机に顔を埋めてしまった。

私たちは洋子を置いて廊下に出てみた。

今朝 洋子と会うはずだった彼が坊主頭になっていた。

それを囁し立てる人たちで廊下が騒がしかったのだった。

カナの予想は外れ

洋子に告白した彼は振られたら坊主頭になると

友達に宣言していたらしい。

それを止める為に洋子は彼を説得していて

遅刻したってことだった。

洋子の説得も空しく彼の決心は固く坊主になってしまった。

学校中 この話が伝わり

面白がって振った洋子の顔を見に来る人で教室の前はごった返して

いた。

洋子は非情の女と言うレッテルを貼られてしまった。この事件で有名になってしまった洋子は自分の好きな人に告白も出来なくなった。しばらく静かにしているしかない。

坊主の頭が伸びるまで この騒ぎは続き消えていった。

そんなある日

私たちが廊下を歩いていると視線を感じる気がした。

「洋子！何かやったの？」

私たちは洋子の顔を覗く。

「身に覚えは無いよ」洋子は泣き顔である。

あの坊主事件には さすがの洋子も参っていたのだ。教室を覗きに来るものまで現れた。

絶対に何かある！

私たちは確信した。

だが・誰にも身に覚えはなかった。

理由を知るのに三日とかからなかった。

坊主頭の彼は双子の兄だった。

その片割れが私のことが好きなんだそうである。私たちの知らないところで弟の頭がどうなるか賭けをしているらしいのだ。

困ったものだ。

勿論私にも好きな人は別に居る。

この話を聞いてカナは大笑いだった。

「告白されたら どうするの？」

お腹を抱えながら聞く。

「そのときにならないと解らないよ！」

カナに八つ当たりをして怒鳴ってしまった。
そんな私を見てカナはさらに笑う。
それにしても頭が痛い問題だ。

洋子は「付き合うことにしたら？」と私に言う。
よほど堪えているらしい。

どちらにしても まだその段階では無い。
弟が現れてからだ。

そんな日が一生来ないかもしれない。
来ないことを私は願った。

だが・

そんな日が来てしまった。

兄の坊主頭が目には焼きついてしまっていたので
私は彼の申し出を受けてしまった。
断る勇気を出せなかったのである。

その結果でも学校中が沸いた。

兄の面子は丸つぶれ

洋子の人気は地に落ちて

私たちカップルは注目の的になってしまった。

初デートの日。

駅までの道のあちらこちらに知った顔が居た。
歩くコースは初めから決まっていたらしい。
まるで見世物のようなデートがスタートした。

5・不調和音

双子事件が私と洋子の間を微妙なものにした。
双子弟と同席するのを洋子は避けた。

解る気もするが洋子と一緒に居る時間が極端に減ってしまった。
その間に洋子は めぐみたちと親密になっていった。

私の家は外泊禁止だったため。

みんながお泊りの時は夜自宅に戻り朝早く遊びに行く。
と言うのが私の決まりごとだった。

お泊りはめぐみの家が定番だった。

その日も 何時ものように朝早くめぐみの家に行った。
だが・この日はなんだか違和感を覚えた。

明らかに昨晚 何かがあったようだった。

それを彼女たちは隠している。

お互いにそのことには触れないような空気を感じながら過ごした。

カナはそれを喜んでいるように思えた。

元々洋子たちをよく思っていなかったから
満足して居るような気さえした。

洋子とカナと私は美術部なのだ。

あまり活動の活発でないクラブなので
私たちは部室を溜まり場にしていた。

顧問の先生もうるさくない人だったので
めぐみたちも集まって毎日遅くまでそこで過ごした。

カナはそれを良く思っていなかった。

部外者が我が物顔で出入りしているのを好ましくないと
感じているのが私には解っていた。

あのお泊りの日以来

洋子が部室に顔を出さない事が増えた。

出してもすぐ帰ってしまうようになった。

私も双子弟との付き合いもあり

洋子のことを気にしながらも月日経ってしまった。

「私 クラブ辞める」洋子が突然言い出した。

軽音楽部に入ることに決めたと言う。

めぐみたちとバンドを組むことにしたそうである。

勿論 洋子には楽器の経験は無い。

浩美にも無かった。

めぐみだけがピアノを小さいときから習っている。

そんな3人がバンドを組むことにした。

「どうして急に！？」私は聞いた。

「・・・・・・」洋子は黙っている。

「何か あるんでしょう？」私は続けた。

「ごめんね・・」洋子はそれしか言わない。

私は洋子を部室に残しまま部屋を出た。

部室の外にはめぐみと浩美が居た。

私は声も掛けずに通り過ぎた。

勿論 向こうも声を掛けてこなかった。

あまりにも突然で裏切られたような気持ちだった。

その時 洋子の気持ちを考える余裕は無かった。

「私・・洋子と喧嘩しちゃった。」みたい。

カナに話した。

カナは微笑み返したただけだった。

あのお泊りの日の秘密は意外なところから耳に入った。

双子の弟君が知っていたのだ。

弟君は兄から聞いたと言っていた。

洋子たちはあの日

夜遊びに出て知り合った子たちと遊び歩いていると言う。
その子たちがバンドをやっているので感化されたい。
しかも そのグループの中に洋子の好きな人が居たのだ。
弟君の話では性質の悪い奴らだという。

「洋子に会わなきゃ」

弟君と一緒に洋子たちを探した。

見つけた洋子たちは別人のようでタバコを吹かしたまま

「なんか用ゝ!？」と聞いてきた。

「洋子 帰ろう!」って私は声をかけた。

「どうして あやと帰らなきゃいけないの!？」

洋子は言った。

「どうせ あやは バンドなんて出来ない!って思ってるんでしょ
う?」

確かに そう思ってたが・・

「絶対 バンドを組むんだ!」

洋子は意地になっているようだった。

「邪魔だから帰ってくれない?」

そう言ったのはめぐみだった。

「良い子ちゃんには理解できないよね?」

と言ったのは浩美。

知らないうちに私は良い子ちゃん扱いになっていた。
別に何かを言ったわけでも したわけでもないのに
私たちの関係は あっという間に壊れていた。

特別な理由が無いので修復は難しく感じた。

その日を境に彼女たちは学校も休みがちになっていった。
登校するたびに何かが変わっていた。

スカートが長くなり
髪の色が変わり
かばんの幅が狭く
言葉使いも変わり
顔つきまで変わっていった。
私一人が取り残されてしまった。

6・冷ややかな視線

カナの蹴る小石の音を聞きながら

私はカナと過ごした日々を思い出していた。

カナを殺したあの日から私が封印してきた記憶だ。

私はカナと関わりあった記憶を忘れるように努めていたのだ。

洋子は あれからどうしたのか！？

私は知らない。

知ろうとはしなかった。

いや・・知りたくなかったのだ。

「あや・・聞いてたの！？」

カナは微笑みながら聞いた。

「私は何時もあやの幸せを願ってるんだよ！解ってるの？」

カナは再度念を押すように言った。

「え？」

私はなんと返事をしたらいいのか解らなかった。

「あ！流れ星！！」

私は流れるほうを指差した。

カナも指差すほうを見た。

「カナの幸せを祈ったよ！」

返事の代わりに私も幸せを祈った。

カナの顔は満足げだった。

「どのアイス買う？」

私はカナと同じチョコ味のアイスにした。

「私と同じものにする癖は そのままだね」

カナが言った。

そう・・私は何時もカナと同じ物を選ぶ。
なぜなら それをカナが喜ぶからだ。

カナは私が出すのを嫌っているように感じていた。
私はカナの冷やかな視線が怖い。

出来るだけ その視線を受けないように努力していたのだ。

「瓶のジュースだ！」

カナは急に瓶のジュースを指差した。

わざとなのか？

私が洋子のことを思い出しているのを感じたのか？

洋子の顔色を窺った。

「私の顔に何か書いてあるの？」

逆にカナは私の顔を覗き込み意地悪そうな顔で笑った。

結局私たちはアイスと瓶のジュースを買った。

「急いで帰ろう！映画の続きを見なきゃ」

カナが小走りに走り出した。

私も仕方なくカナに続いて駆け出した。

「あや！急がないとアイスが溶けちゃうよ」

カナは振り向いて言った。

私は走るのが嫌いだ。

途中から歩き出した。

歩き出した私に気がついたカナは立ち止まり。

「・・・・・・」

何かしゃべりだした。

離れていたので私には よく聞こえない。

「カナ どうしたの？」

私はカナとの距離を縮めながら再度聞いた。

「私 こんなもの要らない」

カナは そう言ってた。

「何を要らないの？」私は聞いた。

カナは たった今買ってきた荷物の袋の中から
瓶のジュースを取り出した。

そして 宙に放り投げた。

ジュースは流れ星のように空を流れ
アスファルトの上で粉々になった。

私はカナの行動をただ見つめていた。

何も言えなかった。

カナの顔から笑顔は消えていた。

私の嫌いな冷やややかな視線をこちらに向けていた。
黙って見つめる私に向かって

「あやは洋子に会いたいのか？」
と聞いた。

7・融けたアイス

粉々に散ったガラスの破片がアスファルトの上で星のようにキラキラしてた。

「カナ・危ないよ。」

私はカナに声をかけた。

カナは何事も無かったように歩き出していた。

私は散らばったガラスを気にしながらもその場を後にした。

「誰も怪我しなきゃいいな」

そう考えた。

カナは家の前を通り過ぎた。

このまま歩き続けると道が無くなり行き止まりである。

そこには忘れられ誰も利用しなくなった公園がある。

街灯が一つ 青白く公園を照らしていた。

風でブランコが揺れていた。

「ブランコに乗ろう」と言いながら

カナは公園に入ってブランコに座った。

「ほれ！あやのアイス」と私にアイスを押し付け

自分はさっさと食べ始めた。

私の頭の中は

「洋子に会いたいの？」と聞かれた

さっきのカナの態度のことではいっばいだった。

カナは何も言わずアイスを食べ続けた。

「あや・食べないの？融けちゃうよ！」

カナに言われアイスが溶け始めてることに気がついた。

アイスを食べる気分はとうに無くしていた。

「流れ星 あれから流れないね〜!？」

カナは何事も無かったような顔して言った。

私は多分怯えた顔でカナを見つめているはずだ。

アイスを食べ終えたカナはブランコをこぎだした。

「あや! 押して!」とねだった。

私は力の限りカナの背中を押した。

そのまま遠くまで飛んでいってくれたらいいな。

フツと そう思いながら押した。

青白い光の中でカナの笑い声がよく響いた。

カナのことをく怖い>そう感じながら

背中を言われるままに押す事しか出来なかった。

満足したのか

「もういいよ 帰ろう」

カナが言い出し私たちは公園を出た。

家に帰ると消したはずのTVがついていた。

「あやの仕事は いつもこうだね」

とカナは笑いながらTVを消して私の方を向き

「いつも詰めが甘いんだから」と言った。

そして

「そんなあやが好きだよ! 憎めないんだ・・・」

カナが呟いたような気がした。

8・・カナの正体

双子の弟君は親切だった。

洋子の居ない寂しさを紛らわせてくれた。

彼が居なければ学校に通っていられなかったはずである。

すっかり変わってしまった洋子たちは思い出したようにしか登校してこない。

出てくると決まって私に突っかかり嫌がらせをする。

「私が悪い？私が何かした？」聞いてみたかったが黙って耐えた。

それがまた彼女たちを苛付かせたようだった。

決まったレールから外れていく彼女たちを馬鹿にしていたわけでは無いが

彼女たちには そう見えるようで

彼女たちと行動をとにも出来ない私に腹を立てていた。

私はやはりいい子ちゃんではないのだ。

彼女たちと仲を取り戻すことは出来ない。

初めからその努力を諦めていた。

そんなある日洋子が話しかけてきた。

「あやはカナだけ居ればいいの？」

私が黙っていると

「いつまでカナ！カナ！って言ってるつもりなの？」

と続けて聞いた。

そして言った。

「カナが どんな奴だか知ってるの？」

「え？」

私が洋子の顔を覗き込んで聞いたが洋子は何も言わず行ってしまった。

「え？カナがなんかしたの？」

そう繰り返して気が付いた。

カナって何組だっけ？

そういえば部室に現れるだけで クラスのことは知らない。

カナの苗字も知らない。

学年も知らない。

彼女のことを何も知らないことに驚いてしまった。

カナは何処？

最近 カナの顔を見てなかった。

急いで部室に顔を出したがカナは居なかった。

双子の弟君に洋子に言われたことを言ってみた。

弟君はその話を黙って聞いたまま何かを考えているようだった。

「弟君もカナのクラス知らないの？」

私が聞いたが彼は黙ったままだった。

そして

「カナは居ないんだよ！」

寂しそうな目で私を覗き込みながら そう呟いた。

9・・・一人の時間

寒い・・・

今日は とても寒い。

誰も集まらなくなってしまった部室はガランとしている。

「こんなに広がったかな？」

私はあたりを見回した。

洋子が居て、浩美が居て、

楽しく過ごしていた日は ついこの前だったはずなのに
とても遠い日だった気さえしてしまう。

弟君が言っていた

「カナは居ないんだよ・・・」

カナは何処に行ってしまったの？

不思議なことに この学校にカナのことを知っている人は居なかった。

カナはこの学校の生徒では無かったのだ。

カナに会えない日だけが過ぎて私は高校を卒業した。

最後にカナに会ったのはいつもことだったか

それさえも忘れてしまうほど長い月日だった。

「カナは居ない」

そういった弟君の言葉がずくずくと気になっていたが

私は弟君に それ以上聞くことが出来なかった。

<聞いてはいけない！>

私の潜在意識が そう指令を出している気がしたのだ。

また弟君も そのことにはそれ以上ふれなかった。

二人の間でカナの話は自然と厳禁になっていた。

いつもそばに居てくれた弟君は
地方都市の大学に進学してしまい
地元で一人取り残されてしまった私は就職した。

私は毎日変わらない日々の繰り返しで退屈だった。

仕事を覚え人に慣れたころ

<同窓会>の通知が送られてきた。

弟君が出席出来ないと言うので私も欠席にした。

行ってみたかったが洋子たちの話も出るであろう場所に

一人で出向く勇気が無かった。

直接 私が彼女たちに何かをしたわけではないが

一人だけ裏切り者のような気分を捨てることが出来なかったのだ。

そして同窓会のことは すっかり忘れていた。

とにかく毎日が退屈だった。

特別心配事も無いのに寝付けなかった。

だらだらした生活をして体を動かさないからかな？

そう思い気にもしていなかったが確かに睡眠不足だったようである。

夏休みになって弟君が帰ってくるのだけを楽しみにして過ごしていた。

一日が何時間にも感じられ時間の感覚が麻痺してしまう日があった。
自分が何をしてたのか？解らない。

ぼくとしたまま時間が過ぎていることに気が付くのである。

「え・・・？もうこんな時間なの？」と自分でも愕いてしまう。

半日 ぼくくとしていたこともあった。

夏休みが来るのが遅く感じられた。

「待ちきれない」そんな思いで

休暇をとって自分から会いに行くことにした。

私らしくない行動だったが弟君は 勿論喜んでくれた。

久しぶりに彼の顔を見て安心した私は その日ぐっすりと寝た。
眠りから覚めた私に彼が聞いた。
「同窓会 楽しめた〜!？」

10・真っ赤なワンピース

「え・・・？」

弟君の質問が理解できなかった。

同窓会って どういうこと？

「同窓会 楽しめたの？」 弟君が再度聞いた。

「一緒に行けないって言うてたから欠席にしたよ！」

私は答えた。

そう答えると弟君の顔は曇り

「あや・・・」

名前を呼んだきり黙りこくってしまった。

長い沈黙の時間が流れ

そして弟君が話し出した。

「あやは同窓会に出席してたんだよ！」

「そんなバカな！ 私は欠席よ！」

私が欠席だと言い張ると弟君が話し出した。

私が真っ赤なワンピースを着て出席してたって兄から聞いたそうである。

「真っ赤な服？ そんなもの着るわけ無いじゃないの！」

そんな派手な服を着たことは無いというか・・・持っていない。

恥ずかしくて着て歩けるわけが無い。

真っ赤なワンピースを着た私は陽気に振舞い場の中心に居たそうである。

そんな馬鹿な。

お兄さんが見間違えたに決まっている。

それにしても誰と間違ったのだろう？

迷惑な間違いである。

だが弟君は繰り返し返した。

「間違いなくあやは出席してたんだよ！」

そう言々と私の手を取り外へ連れ出した。

弟君は黙ったまま私の手を引き歩きだした。

重い空気のまま私は黙って着いて行った。

彼は友達から車を借り走らせた。

向かう先は私には解らない。

弟君の表情はいつもと違いそのことが更に空気を重くし

私はその空気に今にも潰されてしまいそうだった。

「あや・・・君に黙っていたことがあるんだ。」

重い空気の中 運転中の彼が話し出した。

「あや・・・黙って最後まで聞いて欲しい。」

彼は そう言々と首を振り

「いや・・・話は後だ。」

そう一言呟き またもや黙り込んでしまった。

こんな真剣な顔の彼を見たのは初めてだった。

声もかけられず私は黙ったまま外の景色を眺めた。

時間の流れも止まったようで窓の外の景色は一向に変わらない。

ただ コマーコマ流れる景色は懐かしい町

私たちの実家がある町に向かっていることだけは確かだった。

車は弟君の実家の前に止まり即されるまま彼の家に上がった私を

出迎えてくれたのは彼の兄だった。

私たちは兄の入れてくれたコーヒーを飲んだ。

だがコーヒーを飲むために車を走らせてやってきたわけではない。

「話があるんだよね・・・」

私のほうから沈黙を破ってみた。

兄弟は顔を見合わせると兄の方が席を立ち

一枚の写真を持ってきた。

そしてその写真をよく見るようにと言いながら私に渡した。

その写真を覗きこんだ私は安堵して

「カナじゃないの！」と叫んだ。

久々にカナの元気そうな顔を見て嬉しかった。

喜ぶ私を尻目に彼らは再び顔を見合わせ

「よく見て！」弟君の方が私に注意した。

その写真は楽しそうに笑うカナが写っていた。

一体 この写真の何処をよく見れというのか？

私には理解できない。

赤いワンピースを着たカナが同級生と写っているだけだった。

特に変わったことも無い写真に私は思えた。

「何なのよ！」

私は二人に聞いた。

「赤いワンピースのカナがなんだったっていうの!？」

そう二人に言いかけて気になった。

真っ赤なワンピース・・・!？

11・・・封印

「あ・・・」

その時大事なことを思い出してしまった。

真つ暗な部屋でTV画面から出る光りは青白く綺麗だった。

その光りを背にしたカナは　まるで今TVから出て来たみたいだった。

「思い出しちゃったんだね。」　そう言いながら

寂しそうにうつむくカナはさっきまでの意地悪なカナとは別人のよう

で　　なんだか私は落ち着かなかった。

「あや・・・私がどうして現れたのか解ってるの？」　カナが聞いた。

そうひとこと言ったカナの姿がTVの光りと同化して体が透けたように見えた。

「カナ！」　と声をかけようとした　その瞬間。

カナが消えた。

TVから流れる砂嵐の音だけが響く部屋の中で私は一人　ぼくと立ち尽くしていた。

大事なことをまた忘れていた。

それは忘れちゃいけないことだが私は忘れて居たかった。

「カナ・・・」と一人呟いてその場に座り込んでしまった。

知らないうちに眠ってしまったようだった。

あの状態でよく眠ることが出来たもんだ。

TVから流れるアナウンサーの声で気が付いた。

あたりを見合わせたがもちろんカナは居なかった。

そう居るわけが居ないのだ。

私は立ち上がりクローゼットの扉を開けた。

クローゼットの奥に座っている箱を取り出した。

これを取り出すのはあれ以来 始めてである。

あの日 私はカナをこの世から抹殺してしまった。

そして 秘密を隠すようにこの箱の中に埋めたのだ。

私は取り出した箱の蓋をそつと開けてみた。

中に入っていたのは 真つ赤なワンピースである。

取り出したワンピースは 箱から出されて嬉しかったのか
何処からか流れてきた風に吹かれて踊っているようだった。

「カナ！」 私は居ない彼女の名前を呼んでみた。

12・カナが死んだ日

カナは私。

もう一人の私。

そのことに気が付いたときカナは死んだ。

私がやりたかったことを実行してくれたのはカナだった。

グズグズしている私のルールから邪魔なものを排除していたのはカナだった。

カナは私の負の部分。

嫌な事は全てカナに押し付けてきた。

そんなカナを私は捨て忘れていた。

毎日の生活に終われ思い出すことも無かった。

あの弟君と一緒に真っ赤なワンピースを来た自分の写真を見た日。

あの日私は あの部屋を飛び出し自宅へ戻った。

戻った私を迎えてくれたのはカナだった。

カナの顔は脅えてた。

いつもの自信たっぷりなカナの顔とは違った。

いや・・・いつもカナは脅えた顔だったのかもしれない。

私が嫌なことばかり押し付けていたのだ。

「あんたなんか要らない！」私は叫んだ。

私を覗き込むカナの姿を突き飛ばした。

カナは壁にぶつかり そのまま崩れ動かなくなった。

そのカナを台所から持ち出した包丁で刺した。

何度も何度も刺した。

私は泣きながら刺した。

その手を止めたのは追ってきた弟君だった。

「あや・・・もういいよ！カナは もう居ない」

その声で私は手を止めた。

私が包丁で刺していたのは真っ赤なワンピースだった。
カナの姿など無かった。

確かにそこにカナが居たはずだったが姿は無かった。

「初めからカナは居ないんだよ」 弟君が声をかけた。

私は黙って弟君の顔を見つめ頷いた。

真っ赤なワンピースは箱に入れてクローゼットに入れた。
なぜだか捨てる気にはなれなかったのだ。

私はカナを忘れたくなかったのかもしれない。

そのときはそのことに気が付かなかった。

13・あれから30年

クローゼットに秘密を押し込めたまま何年たったのだろうか？

クローゼットは何回も変わったが 箱だけはそのまま連れて歩いた。
いや・連れ歩いた記憶なんて無い。

ある日気が付くといつもそこにそれがあった。

そこにあるのが当たり前のような顔をして座っていた。

ほぼ30年ぶりにカナが現れたとき

実は死ぬことだけを考えていた。

もう全てが嫌になっていた。

カナに「死ね」と言われて生きてきた。

私は彼女に生かされていたのだった。

カナが再び消えて忘れていた現実が甦ってきた。

自ら命を経つ日まで決めて準備していたではないか。

この世に未練は無かったはずである。

そうだ・・・弟君に一目会いたかったな。

そんな感情が湧いた。

彼は私のことを知りすぎていたから一緒に居ることを

私が拒んでしまった。

私は怖かったのだ。

再びカナが現れることが

再びカナを思い出すことが

彼とはあれ以上一緒に居ることは出来なかった。

彼の手を離し私のことを知らない人の中で生活を始めた。

そして30年

今の私は もう進めない。

箱から出された真っ赤なワンピースが風に揺れ

私を笑っているようにも見えた。

これはカナを殺した罰なのだろうか！？

私はそのとき「世の中で一番不幸なのは自分だ。」

そう思い込んでいた。

涙が流れた。

頬を伝う涙は次から次と溢れいつまでも止まることが無かった。

気が付くとまた夜になっていた。

私は 泣きつかれて眠っていたようだった。

時間だけが私の知らないうちに過ぎていた。

握っていたはずの真っ赤なワンピースが箱に収められ

クローゼットの中で正座していることに

そのときは気づいていなかった。

14・カナと共に。

目が覚めた私は 無くなった真つ赤なワンピースのことなど気づきもせず

起き上がるとボくくつとした頭を抱えて歩き出した。

台所へ行き包丁を手にした。

手にした包丁を喉元にあててみた。

とても引けそうには無かった。

続いて手首に当ててみた。

今度はそつと引いてみた。

わずかに血が滲んだだけだった。

これが世に言う躊躇い傷なのかな？

ふと そう感じた時 我に返った。

「何をやっているんだろう・・・！？そんなことじゃ死ねないのに。」

自分で自分を切りつけるなんて出来るわけがないよ。

出来るぐらいなら もうこの世に存在していなかったはずなのだ。

この30年は長かった。

私はこの間の苦しみはカナを殺した罰だと思つてた。

そう考えたから生きていられたのかもしれない。

カナのことは忘れたといつても

私の何処か奥の方では覚えていたはずである。

忘れることが出来るわけが無いのである。

だから幸せになつてはいけない。

そう無意識に人生を歩んでいたのかもしれない。

そんな風にも思えてきた。

カナは私であつたのだから私は半分になつてしまつたのである。

一つにならなければ。。。。

それには私がカナの元へ行かなければ行けないのだ。

カナも方から迎えに来てくれたのに一緒に行くことが出来なかった。

今からでも遅くないはずである。

カナが待っていてくれるはず

そう考えると自らの命を絶つことが幸せへの道であるような気さえしてくるのである。

私はドアノブにタオルをかけ首を入れた。

15・お花畑

苦痛は感じなかった。

むしろ安堵感で満足な気さえした。

フツと意識が遠のき

「これで終わりだ。」

そう感じたのを微かに覚えている。

次の瞬間

世に言うくお花畑くには私は居た。

いや！

お花畑を上から見つめていた。

そこには真つ赤なワンピースを着た女の子がいた。

隣はベビーカーに乗った赤ちゃん。

女の子は赤ちゃんに語りかけていた。

「一人で帰ってね。」

そう言うベビーカーをそこに残したまま川を渡り始めた。

「バイバイ！」

女の子は渡りながら何度も振り返って手を振っていた。

渡り終わるとしばらく川向こうのベビーカーを眺めていたが

意を決したような表情をしたかと思ったら駆け出した。

一度立ち止まり涙を拭いたようにみえたが

振り返らず先を急ぎ走り出した。

女の子は あつという間に見えなくなった。

赤ちゃんも気になったが私は女の子を追ってみた。

女の子はすぐに見つかった。

いや・見つけたというより女の子は待っていたようだった。

女の子は空を見上げていた。

「やっぱり来てくれた！」

そういうと笑った。

喜んでるように見えた。

「私は 行かなきゃいけないので赤ちゃんをお願いします。」
そう言った女の子が 下を向いて何かを呟いたように感じたが
私には聞き取れなかった。

彼女に頼まれてしまった私は赤ちゃんの元へ急いだ。

一人残された赤ちゃんは泣きもせず笑っていた。

赤ちゃんの顔を覗き込んでみた時 妙な安堵を感じた。
と・・・・・・・・

「え？」

私の視界から赤ちゃんが消えてしまった。

私の視界に広がるのは花畑だけだった。

赤ちゃんは 何処へ行ってしまったのだろうか！？

川向こうの女の子が「あやちゃん・・・」

そう呟いてたことに気づいていればよかったのだが
その時 私は気づくことは出来なかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8742d/>

カナ・・・大好きだよ。

2010年10月10日00時31分発行